

1. パンフレット「交通事故で家族を亡くした子どもの支援のために」の概要

目的	<p>交通事故により家族を亡くした子どもを対象に、交通事故により被った様々な影響からその回復等につながる情報を提供するため、パンフレット「交通事故で家族を亡くした子どもの支援のために」を作成した。</p>
対象	<p>パンフレットの読み手の対象は、交通事故により家族を亡くした子どもの保護者や子どもを支援する方を想定しているが、子どもの頃に交通事故により家族を亡くしたご本人にも読んでいただけるように作成した。</p>
作成方法	<p>平成22年度に実施した「子弟に対するアンケート調査」及び、平成23年度に実施した「子弟に対するWeb調査」の取りまとめ結果をもとに、パンフレットを作成した。</p>
内容	<p>パンフレットの内容については、「交通事故で家族を亡くした子どもの反応」「子どもへの対応のポイント」「亡くなったことについての説明のポイント」「支援情報と支援機関の紹介」により構成した。</p>
配布先	<p>パンフレットについては、各都道府県・政令指定都市の交通安全対策主管課、各都道府県の被害者支援センター等へ配布。また、各都道府県に対しては、教育機関や精神保健福祉センター等の関係機関への周知を依頼するなどパンフレットの活用を促した。</p>

2. パンフレットの構成

<p>第1章 交通事故で家族を 亡くした 子どもの反応</p>	<p>気持ちの反応 (9項目)</p>	<p>例) ・ 家族が亡くなったのは自分のせいと思う自責感 ・ 漠然とした不安 等</p>
	<p>からだの反応 (4項目)</p>	<p>例) ・ 眠れなくなる ・ 気力や意欲、物事への関心が無くなる 等</p>
	<p>行動の変化 (10項目)</p>	<p>例) ・ 勉強や仕事に集中できなくなる ・ 家族との会話が減る 等</p>
<p>第2章 子どもへの対応</p> <p>対応のポイントは 「親」「支援者」 に分けて記載</p>	<p>事故直後の対応 (親：5項目) (支援者：3項目)</p>	<p>例) 〔親〕 子どもに事故の説明をする 〔支援者〕 家庭への支援をする(通夜葬儀の手伝いや付添い) 等</p>
	<p>事故から数週間後の対応 (親：4項目) (支援者：3項目)</p>	<p>例) 〔親〕 子どもと親自身のことを気にかける 〔支援者〕 事故前と同じように子どもに接する 等</p>
	<p>事故から数カ月後の対応 (親：5項目) (支援者：3項目)</p>	<p>例) 〔親〕 故人の思い出を共有する 〔支援者〕 子どもの体調や精神面に気を配る 等</p>
	<p>子どもが不快と感じる対応 (親・支援者：8項目)</p>	<p>例) ・ 親に疑問に思うことに答えてもらえないこと ・ 周囲に「がんばれ」と言われること 等</p>
<p>第3章 亡くなったこと についての説明</p>	<p>亡くなったことについての 説明のポイント (5項目)</p>	<p>例) ・ 子どもにもわかりやすい言葉で、はっきり説明すること ・ 落ち着いて話をすること 等</p>
<p>第4章 支援情報と支援機関</p>	<p>支援情報 (3項目)</p>	<p>① 心身の困難さや行動面の変化に関する情報 ② 家族関係や友人関係に関する情報 ③ 学業に関する情報</p>
	<p>支援機関等一覧</p>	<p>① 精神的な事柄についての相談 ② 子どもの相談全般 ③ 育成資金等貸付制度の相談 ④ 交通事故に関する支援機関・団体(被害者団体を含む) ⑤ 参考となる書籍等 ⑥ 参考となるインターネットウェブサイト</p>

3. パンフレットの主な特徴

- ① テーマ毎にポイントを提示
- ② ポイントについては、詳細に説明
- ③ 数値から傾向が把握できるよう「Webアンケート調査結果」を掲載
- ④ 具体的な事例として「Webアンケート回答者」のコメントを掲載
- ⑤ 随所にイラストを掲載

第1章

交通事故で家族を亡くした子どもの反応

1 気持ちの反応

交通事故で家族を亡くした子どもによくみられる気持ちの反応としては、主に以下のようなものがあります。なお、このような反応が、交通事故で家族を亡くした子どもにみられることは自然なことであり、決して異常なことではありません。

- 1 家族が亡くなったのは自分のせいと思う自責感
- 2 漠然とした不安
- 3 遺された家族や自分も死ぬのではないかと不安
- 4 自分ががんばらなくてはと意気込む気持ち
- 5 自分だけ楽しんではいけないと抑える気持ち
- 6 社会や様々なものに対する怒り
- 7 遺された家族に対する怒り
- 8 誰も信じられないという気持ち
- 9 そっとしておいてほしいと願う気持ち

1 家族が亡くなったのは自分のせいと思う自責感

● 「交通事故に遭った原因が子ども自身にはない」とわかっていても、無理に自分に非があるように思う子どもは少なくありません。例えば、「なぜあのとき止めなかったのか」「亡くなる前に喧嘩したから死んでしまったんだ」と、事故の責任が自分にあるかのように考えることがよくあります。程度の差はあるにせよ、ほとんどの子どもが自責感や罪悪感を持っているのではないのでしょうか。

● また、このような自責感から「自分が死ねばよかったのでは」という気持ちを持つこともよくあります。例えば、「なぜ自分ではなく兄だったのだろう」「どうして自分が生きているのか」「妹より自分が死んだほうがよかった」という思いです。

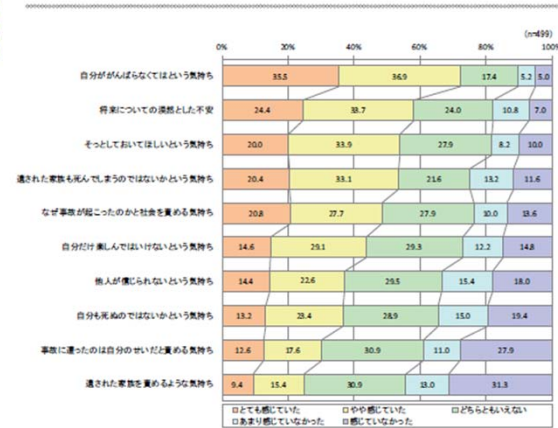


②ポイントについては、詳細に説明

アンケート結果グラフ

グラフは、「事故後に感じた気持ちの反応」についての回答結果です。事故当時の年齢や事故の状況等がそれぞれの子どもで異なりますので、全ての子どもに当てはまるものではありませんが、アンケートにおける回答数が多いものについては、比較的起こりやすい反応と考えられます。

図1 事故後に感じた気持ちの反応



平成23年度内閣府交通事故被害者サポート事業報告書 WEB 調査結果より

子どもをそっと支える

支援者の対応 事故後、子どもは「そっとしておいてほしい」と思いながらも、さりげない気遣いを嬉しく思います。そっとしておきながらも、「困ったらいつでも相談にのる」ということは、伝えておくようにしましょう。なお、子どもが相談してきたら、「がんばれ」「しっかりしなさい」等のはげましの言葉をかけるのではなく、話を聞いて気持ちを受けとめるようにしましょう。気持ちを安心して話すことができることは、子どもの回復にとって大切なことです。



子ども達の声

- 学校を休んでいる間、勉強の面で先生や周囲が気遣ってくれた。
20代男性（15歳のときに姉を亡くされた方）
- 友人が何も聞かずに話を聞いてくれた。
20代女性（17歳のときに父親を亡くされた方）
- 担任の先生が奨学金の申請をしてくれた。
30代女性（15歳のときに父親を亡くされた方）

平成23年度内閣府交通事故被害者サポート事業報告書 WEB 調査結果より

④具体的な事例として「Webアンケート回答者」のコメントを掲載

①テーマ毎にポイントを提示

③数値から傾向が把握できるよう「Webアンケート調査結果」を掲載

⑤随所にイラストを掲載